令和8年度
学校だより
5月号

Shin OGURA

新しい自分をつくる
未来をつくる

令和8年4月28日

「待つ」という愛情

校庭の木々が鮮やかな緑に染まり、初夏の風が心地よい季節となりました。開校２年目の春、子どもたちは新しい学級や担任にも少しずつ慣れ、校内には活気ある声が響いています。

■その一言は、「誰のため」のブレーキですか？

新年度の緊張感が少しずつほぐれ、学校では子どもたちの「素の顔」が見えるようになってきました。それと同時に、家庭では「宿題はやったの？」「早く準備しなさい！」と、つい声を荒らげてしまう場面が増えてはいないでしょうか。近年、教育の現場で注目されている言葉に「マルトリートメント（不適切な関わり）」があります。これは身体的な虐待だけでなく、激しい言葉で威圧することや、子どもの尊厳を傷つける態度も含まれます。しかし、多くの場合、保護者の皆様の根底にあるのは「この子に失敗してほしくない」「自立してほしい」という切実な愛情です。 ただ、その愛情が「先回り」や「過干渉」という形で行き過ぎてしまうと、子どもから「自分で選ぶチャンス」を奪ってしまいます。大人がブレーキをかけ続けると、子どもは自分のハンドルを握り方を忘れてしまうのです。

■「自己決定」には、失敗する権利も含まれている

本校が掲げる「自己選択・自己決定」は、何も「好きなことだけをやる」という意味ではありません。自分で決めた結果、うまくいかなくて困ったり、後悔したりするプロセスこそが、学びの本体です。 忘れ物をして困る、準備が遅れて自分が焦る。そんなとき、大人が「ほら言わんこっちゃない」と突き放すのでもなく、「だから先にやりなさいって言ったでしょ」と支配するのでもなく、「次はどうすればいいと思う？」と、解決のハンドルを子どもに預けてみる。 この「待つ」という姿勢こそが、マルトリートメントを防ぎ、子どもの自尊心を育む最大の鍵となります。

■５月の個人面談を「作戦会議」に

５月に行われる個人面談は、単に学校での様子を報告する場ではなく、お子さんの「自律」をどう支えていくかを確認し合う「共同作戦会議」にしたいと考えています。

- 学校で見せている「頑張り」と、家で見せる「甘え」から見える様々な子どもの姿。
- 子どもは、これからどんな「新しい自分」になっていきたいか。
- 保護者はどんな大人に育ってもらいたいと思っているか。

ぜひ、お父さん・お母さんの視点から見えるお子さんの姿をたくさん聞かせてください。学校での姿と繋ぎ合わせることで、一人ひとりに最適な「見守りの距離感」が見えてくるはずです。

開校２年目。私たちはこれからも、子どもたちが安心して「失敗できる」場所でありたいと願っています。保護者の皆様も、完璧な親であろうとせず、子どもと一緒に試行錯誤する過程を楽しんでいただければ幸いです。

川崎市立新小倉小学校　　校長　田中　康子